

<レポート>

東日本大震災被災地の今

一岩手県釜石市・大槌町・陸前高田市を訪ねて一

山田 恵子

今から3年半前の2011年3月11日午後2時46分、私の故郷である宮城県を含む東北地方は三陸沖を震源地とするマグニチュード9.0、最大震度7の地震に見舞われ、巨大津波、福島にある東京電力の原子力発電所の爆発事故とそれに続く放射能汚染により、今なお、多くの人々が厳しい環境に身をおいている。

昨年の通信で、被災地である仙台で学んだ東北大学同窓会北海道連合会に属する有志で結成された「みちのく復興・学び支援隊」の活動について報告させていただいた。昨年は活動のテーマを「震災からの学び(=震災を忘れない)」とし、現地訪問を企画し、母校での農地土壌に対する津波の影響に関する調査のお話を聞いたり、宮城県の津波の被災地である石巻と仙台、荒浜地区、名取閉上(ゆりあげ)地区を訪問した。今年、訪問先を岩手県の被災地とし、釜石市、大槌町、陸前高田市を選び、釜石被災地ガイド、大槌町被災地ガイドならびに陸前高田市被災地ガイドによる説明を受けた。

日程は2014年11月1日-3日(2泊3日)である。全行程の概略を右の表に、訪問地の場所を左下の地図上に示した。

被災地訪問日程	
1日目(11月1日、土曜日)	仙台 → 新花巻 → 釜石着 釜石被災地ガイドによるツアー参加 根浜海岸「宝来館」根浜海岸の環境整備活動
2日目(11月2日、日曜日)	釜石市 鉄の歴史館見学 大槌町被災地ガイドツアー(旧役場前→町方地区→蓬莱島など)
3日目(11月3日、月曜日)	陸前高田市被災地ガイド(一本松跡、旧市役所、気仙大工左官伝承館など) 大船渡 碁石海岸(日本の渚百選・三陸を代表する景勝地) 碁石海岸 → JR気仙沼駅 → 一ノ関 → 仙台着

今回のツアーに参加して、震災後3年半も経ったにも関わらず、訪ねた所の復興は想像していた以上に、まだまだ先のことであることを知った。

参考までに、今回訪れた市町村での津波による死者・行方不明者数を下の表に示した。



訪問先の死者・行方不明者数 2014年3月1日現在

	死者	行方不明者
大槌町	853	431
釜石市	989	152
陸前高田市	1599	215

ツアーは、我々がレンタカーを借りて運転をし、乗り込んだガイドの案内で、さまざまな場所へ赴き、要所要所で下車し、お話を聞くという形式で行われた。被災地でのガイドの方や、お店や食堂などで出会った方々との交流を通して、見えてきたもの、感じたことなどを中心に記したい。

【1】釜石市

仙台から新花巻経由で釜石に降り立った。新花巻から釜石までの列車は、殆ど山の中を走る路線で、岩手県の三陸海岸線に中央から向かうときの困難さを実感した。釜石は日本の近代製鉄発祥の地であるが、1989年に高炉を休止した後は線材の生産のみを行っている。工場は釜石駅前にあるが、土台を高くつくっているため、津波の被害を受けなかった。釜石は製鉄所で栄えた都市であり、最盛期には9,000人を越える人が製鉄所で働いていたそうであるが、現在は約200人ほどが働いているだけとなり、津波の影響もあるだろうが、町に活気が感じられないように思った。かつて4万人をこえた人口も減少の一途をたどっているようである。わたしたちは、釜石観光ボランティアガイド会（夢ふれあい隊）の藤井静子さんに、釜石市の被災地を案内して貰った。釜石は明治29年と昭和8年の2回、大きな津波を経験しているが、港湾防波堤があるために、大丈夫だと考えた人が多く、市街地でも220名の方が亡くなっている。市街地では地盤沈下も続いている。釜石の小中学校では「津波てんでんこ」の教育がなされており、3月3日に防災訓練をしていた。「てんでんこ」とは「各自」、「めいめい」を意味する名詞「てんでん」に、東北方言の「こ」がついた言葉であり、「津波てんでんこ」はそれぞれ「津波が来たら、取る物も取り敢えず、肉親にも構わずに、各自てんでんばらばらに一人で高台へと逃げろ」「自分の命は自分で守れ」になると説明されている。「津波てんでんこ」の教育を受けていた釜石市の小・中学校生は、地震の直後から教師の指示を待たずに非難を開始した。「津波が来るぞ、逃げるぞ」と周囲に知らせながら、保育園児や小学低学年児、お年寄りの手を引き、訓練で指定されていた場所では不十分であるとの判断を、自らが行き、全員無事非難することが出来た。藤井さんの説明を聞きながら、実際に皆様が避難した道を歩いた。後に「釜石の奇跡」として語り継がれることになった事例である。このお話を藤井さんから聞きながら、藤井さんのいう「逃げる文化」について考えた。逃げる文化の観点で、考えていくと、逃げるための道路の整備なども必要であることを強調されていた。釜石を含め、各地で頑丈であったはずの防波堤が破壊され、逆に防波堤があるから大丈夫と考えて逃げるのが遅れた人々がいることも知って、津波が来たら高い所へ逃げるといふ非常に単純な教育がもっと徹底されても良いと思った。

藤井さんと別れたあと、根浜海岸の清掃活動をほんのちょっとだけ経験した。ここでは以前北海道で学生生活を送り、現在「三陸ひとつなぎ自然学校」で活動を行っている柏崎さんのお世話になった。釜石の根浜海岸はかつて白砂、松林のきれいな海岸であったが、津波によりがれきの山になってしまった。3年8ヶ月経った現在は、ボランティアによるがれきの撤去作業も終わり、かなり綺麗になっていた。わたしたちは松林の落ち葉を掃くという作業をちょっとだけ行うことが出来た。この作業は思ったより楽しく行うことが出来た。

夕食は釜石市のはまゆり復興商店街にでかけ、地物の魚を使った海鮮料理を味わった。公園内に建てられた仮設店舗で、津波の被害にあった約50店舗が営業をしていた。お店では、お店の方のお話、静岡からボ



住民の多くはこの高台に非難した



釜石市 根浜海岸の環境整備活動

ランティアにやってきた方々との交流を楽しむことが出来た。

翌日は大槌町訪問の待ち合わせが午後だったため、午前中に、釜石市の鉄の歴史観を訪ねた。時間がたっぷりあったので、歴史館で働いている方との交流を持つことが出来た。その方の話しによると、釜石は製鉄所とともに発展してきた町であるが、製鉄所への依存度が高かった分、製鉄所の縮小後、何を軸に、あるいは何を売りにして、釜石を再建して行くのかの計画がなかなか進んでいないようである。その方は、2019年ラグビーW杯開催地への立候補も良いけれど、もっと未来永劫持続可能なアイデアが求められるのではとおっしゃっていたが、もっともだと思った。

【2】大槌町

大槌町の復興きり商店街がガイドツアーの方との待ち合わせ場所であった。釜石から大槌町に向う道の両側は、かさ上げのため、土が盛られている光景が至る所で見られた。かさ上げた土が安定するまでブルーシート



シートでおおわれている場所もあったが、盛り上げられた土が崩れている場所もあり、大丈夫だろうかと心配になった。商店街には時間より早くついたので、食堂で昼食をとったあと、ぶらりと「さけ最中」、「コーヒーがあります」とののぼりがあったお店に入った。大槌町では昔からサケの養殖をやっていたところで、それにちなんだ最中であった。もともとご主人が和菓子屋さんをやっており、息子さんも含めて皆で頑張っていたお店であったが、津波で流され、ご主人も津波に流されて

しまい、一時期は廃業も考えたとのことであったが、今は息子さんと一緒に、店の再建に向けて仮設店舗で頑張っていると力強く語っていただいた。困難から立ち直り、覚悟を持って進み始めた方の笑顔が素晴らしく、お願いして写真を撮らせていただいた。

大槌町は、遠野から殿様が派遣されていたという歴史があり、人々はそのことに誇りを持っているように感じた。大槌町でお世話になったガイドの赤崎さんは、本業は鍼灸師で津波当時、町内会長をなされていた方で、ご自身も家を津波で流された。大槌町では、毎年避難訓練をやっていたが、防波堤があること、町が指定した避難場所だから大丈夫と考えた方が多くいて、約1,300人の方が亡くなっている。特に多くの方が亡くなった町役場を訪ねたが、役場の側、恐らく歩いて15分くらいのところに、お殿様がいた城山があり、そこには公民館がある。多くの死者を出し、無惨な姿をさらしている役場の前に立ったとき、なぜあそこに逃げなかったのだろうという疑問が沸き、残念でならなかった。城山にある公民館に非難した人は助かったが、非難していた方のうち親が迎えにきて一緒に帰り、小学生3名、中学生2名、高校生6名が亡くなった話しを聞き、「釜石の奇跡」の話とは全く逆の行動をとってしまったことを知った。町役場も対策本部を役場の前の空き地に設置していたため、役場の職員の半数以上が亡くなるという事態であった。



ガイドの赤崎さんは町内会長として、敏速に行動し、家は失ったが、多くの命を救った。城山の斜面にはお墓があり、山裾にはお寺があった。最初の避難指定場所であるお寺にお年寄りを含め、多くの方を非難させたが、地震の規模が、かつて経験したことのない大きいものであったため、より上へという判断をし、疲れて動けないお年寄りを励まし、叱咤激励しながら墓地の階段を登らせ、城山に非難させた。最初に避難したお寺は流され、その後出火し、そこに留まった多くの方々が命を失った。焼け跡から掘り出された鐘楼が置かれていたが、割れ、変形しており、水や火の威力を思い知らされた。「ここまで水が来た」という赤崎さんの案内で、私たちも母墓地の斜面を登ったが、階段は狭く、急であり、当日お年寄りたちを避難させることの困難さは容易に想像できた。赤崎さんは「命さえあれば、また会える」、「這ってでも1メートルでも上へ」という言葉を何度も強調されていた。大槌町でもより高い堤防を作ることが計画されているようであるが、赤崎さんは防波堤を作ることには反対の立場をとっており、防波堤より逃げるための沢山の道路を作ること、食べ物の備蓄、避難訓練の徹底を強調されていた。城山の斜面に墓地があり、墓参りのための小さく、急な階段があったので、今回避難できたが、この斜面が単なる山の斜面だったなら、さすがの赤崎さんも登ることは出来なかったのではないかと思ひ、城山に登る道を2～3本作ることを希望している赤崎さんの願ひは良く理解できた。このような道路整備に関しても、住民の間で意見が異なっているようだ。赤崎さんは老人の立場から、足腰が不自由な年寄りでも避難可能なように、例えば一人乗り用の電気自動車を通れる程の細い避難道路を沢山作って欲しいと思っているが、若い人は広い道路を作れといい、住民の間でも意見の違いがあり、なかなかまとまらないようである。また、ローンが残っている家が流されてしまった場合のローンの扱いに対しても、被災者にとっては矛盾を感じてしまう扱いのようであった。



城山の斜面にある墓地。中腹まで水が来て、かなりの墓石が、破壊されていた。赤崎さんは、お年寄りを励まししながら階段を登り、城山に避難し助かった。

【3】陸前高田市

陸前高田市では、陸前高田観光ガイド、ガイド部会会長、新沼岳史さんの案内で、被災地を回った。陸前高田市では、市役所などの指定避難場所は過去の津波（明治29年と昭和8年）到達地点より陸側に建てれば良いという考えで指定されたが、今回の津波は過去の津波をはるかに越える大きなものであったため、人口24,000人に対して約2,000人が亡くなってしまった。お隣の大船渡市（人口約40,000人）では病院などの公共施設を建て替える時に、高台の方へ移設して建てていたため、死者の数が約500人であったことと対照的であった。陸前高田市には3階建ての建物が殆どなく、3階建ての市役所の屋上に逃げた人は助かったことを思うと、本当に残念なことであった。また市役所の対応に対しても、市民センターでの死者の数を当初非常に少なく発表するなど、市に対する不信感が増大するような事態が次々とでてきた。

大津波が到達した場所は、今後住宅は建てない方針であり、盛り土をして、商店街にする計画である。しかし、復興工事に関してはURなどゼネコンが入って工事をしており、地元の人たちの雇用の場には必ずしもなっていない。復興の計画に対しても、地元の意見は殆ど通らないのが現実による。市は盛り土のほか、高さ12.5メートル、上辺幅4メートル、底辺幅50メートルの堤防を計画しているが、堤防より避難道路の充実を訴えている住民が多いとのことであり、ガイドの新沼さんも、盛り土、堤防の建設には懐疑的であった。実際に、大槌町、陸前高田でさかんに行われている盛り土を見たが、たかだか数メートルのかさ上げが、大きな津波がきたときにどれほどの効果があるものなのか、それよりも海の側に住むと言うことは、

津波の被害があることを肝に命じ、津波が来たら「より高い所、より遠い所」へ逃げることを徹底させる方が良いのではと思った。

右の写真に示したように、土盛りをするための土砂を、山から運ぶための長いベルトコンベアが作られていた。これを作るために120億円かかったが、一日に10トン積ダンプ4,000台分の土を運ぶことができるので、ダンプによる移送なら10年かかる分を2年で運ぶことができるとのことであった。たくさんのダンプが走ることには途中にある橋が耐えられないし、ダンプが走ることによる土ぼこりがないので納得できる部分もあったが、ベルトコンベアが盛り土をする場所のかなり手前で終わっていること、



陸前高田市 巨大ベルトコンベア

土を取り崩す山として、もっと近い山があるのに遠くの山から運んでいることなど、変だなと思うこともあった。ベルトコンベアから盛り土までの移動は人の手によらねばならないが、新沼さんの説明では働き場所の確保ではないかとのことであった。このベルトコンベアは終了後も一部記念に残してはという意見もあるようである。

陸前高田市は陸中海岸国立公園（現、三陸復興国立公園）の一部で、日本百景に指定されていた高田松原には江戸時代に植えられた松の木が7万本あった。松原の海側には3メートルの高さの堤防があったが、現在は砂に埋まっていて、頂上部分がまるで舗装道路のように砂浜から出ている。津波前はそこから海までは砂浜になっていて、絶好の海水浴場であり、この松原の再生を望む人は多い。

「奇跡の一本松」は高田松原の西はずれにあった樹高28メートルのアイマツ（赤松と黒松のハーフ）で、海側にあったユースホステルが津波よけとなったので流されなかったとのことである。長い間塩水の中にあっただけで、その後枯死し、モニュメントが作られたが、市民の間でこれには賛否両論があるようである。モニュメント作成に1億5千万円の費用がかかった（この費用は、全額寄付金でまかなった）が、このモニュメントは10年ぐらいいかもたないとのことであった。お金の無駄使いであるという意見が、特に仮設住宅に住んでいる人たちの間からは出ているという。他から似た松の木をもってきて植えるという考え方もあったようだ。



陸前高田市 高田松原復元のための育苗畑

奇跡の一本松の子供が現在1メートルぐらいいまで育っている。

「市民の森」へ行く途中に高田松原の松の種子を発芽させ、将来、松原を再生するための育苗をしている畑があった。小さいものは数センチメートル、大きいものは1メートルぐらいになっており、何年かかるかわからない壮大な計画ではあるが、松がすくすくと育ち、海岸に移植される日の来ることを願った。

市では、現在4つの建物を残す計画がなされている。そのうちのひとつが陸前高田の道の駅である。この建物ではイベントのための観客席が上の方に設けられており、



その上に逃げて助かった方がいたそうである。この建物の中ではだれも死ななかつたことで、記念に残すという考えに反対はなかつた。この建物の中を覗くと、流されてきた松の木が1本きちんと納まっているのが見られ、鉄柱等がひしゃげているのと合わせて、津波の威力を感じる事が出来た。

また、海岸付近にはホテルやその他の建物が多くあったが、手抜き工事で話題になったアネハ関連の建物が無事で、そうではないホテルが流されてしまったなどの、ある意味興味深い話しも聞く事が出来た。

大震災の前日に地震があった。その際、陸前高田市気仙町の中学校では津波に備えて高所に避難した。津波は20センチメートルという小さなものだったが、結果的にそれが避難訓練になって11日当日はスムーズに避難する事ができた。「おおかみ少年」の話もあるが、石巻や大槌町で聞いた話しも含め、津波がきたら、まずは高台に逃げるという文化を徹底させる事が大事なのではないかと思った。

陸前高田市の復興住宅の進捗率は現在7%ぐらいにしかない。移転先の土地の所有者が何千人にも及ぶので、登記移転が大変である。なかにはきちんと相続手続きが行なわれていないので誰のものやら分からない土地もある。などが遅れている理由のひとつである。

ツイッターの不満度調査というのによれば、住民の不満度が高い地域は女川、陸前高田、大槌など、いずれも今回の津波による被害が大きかったところであることは注目すべきであると考える。

【最後に】

今回は、2年前の仙南地区の山元町、1年前の石巻・仙台若林地区・名取市閑上地区訪問につぐ3度目の被災地訪問の旅であった。年を経るごとに、がれきの山が消え、田んぼの復活も目にする一方で、まだ殆ど何もなされていない光景も今年の訪問では目にした。本当に行政は被災した方々の思いに沿った復興をめざしているのだろうか？復興はそこに住む人々のための復興であるはずなのに、3年8ヶ月も経た今なお、多くの人々が仮設住宅に暮らし、仮設住宅で亡くなって行く現実、陸前高田市での復興住宅の進捗率は現時点で7%であるという現実をどう自分の中で処理したら良いのか、非常に困難であった。何百億円もの費用をかけ、陸から海の見えない監獄のような町を作ることが再生なのか？縄文時代からの歴史があり、豊かな自然に恵まれた三陸の文化を維持し、後世に残すためには、どのような方法が良いのか。などまだまだ解決して行かなければならない問題は大きい。

お世話になった3名のボランティアガイドの方は、皆それぞれの形で、津波の被害に遭われ、テレビなどでは報道されることのない生の声を私たちに届けて下さった。感謝であり、そのことがこのようなツアーに参加することの意味であるようにも思う。また、お店やホテルで接した方々が皆一様に「来てくれてありがとう」と言って下さった。特にボランティア活動に参加しなくても、被災地に赴くことが、支援のひとつの形なのかもしれないと感じた。

今回、お話をきいたり、被災地を見て思ったことを今はまだ、きちんとした言葉には表せないでいる。しかし、強く思ったことは、「人工の構造物は自然の力の前には無力である」ということである。科学者の端くれとして生きてきたわたしではあるが、自然が持つ力の前に、今こそわたしたちは謙虚であらねばならないのではないか、犠牲になった方々はそのことを我々に教えているのではないかということを感じた。

最後に、この報告を書くに当たり、ツアーに参加した先輩である山田正二氏、後輩である安倍隆氏の記録や写真を参考にさせていただいたことに感謝致します。また、仕事の関係でツアーに参加できなかったが、ツアーの企画立案に尽力いただいた後輩の森健吉氏はじめ「みちのく復興・学び支援隊のメンバー」にも感謝致します。